

地球は面白い

イギリスは緑豊かな国だ。といつても人跡未踏の自然な

どほぼ皆無であり、ほとんどの自然の景観には人の手が加えられている。ヒースに覆われた寂しげな丘や、うっそうとして見える森すらも、人間が管理し続けてきた成果である。人為的な自然。湖水地方も例外ではない。湖水地方とは、イングランドの北西端、標高千以上の山々の間に氷河時代にできた大小さまざまな湖をいだけ、広さ房総半島くらい地域の域である。

イングランド随一の自然美を誇るこの観光地は、「手つかずの自然が残されている」ことになつてはいるが、厳密に言えば正しくなく、全く何もしないでいけば、湖の埋め立ては進み

イギリス・湖水地方

中野 香織

物は摘み取られ、醜悪な建物が立ち並んで俗化がすすむのがつづただからである。

この「ふつう」の流れを食い止めようと立ち上がった人々がいた。カノン・ロンスリー牧師ら湖水地方ゆかりの三人である。政府の力なく全くとてにせず、彼らは環境文化保護協会が

シヨナル・トラストを創始する。一八九五年のことである。同じころ、湖水地方の住人だったベアトリクス・ボターはこの地を舞台に『ピーター・ラビット』(一九〇二年)を書き、人気作家になった。印税でこの

地方に広大な土地を購入した彼女は、当時のままの姿を維持するという条件で、ナシヨナル・トラストに大部分を託す。ゆえにこの地に百年前の自然の姿が「手つかず」に残るといふ奇跡がある。

全くの非営利団体であるにもかかわらず、ナシヨナル・トラストの運動は現在に至り、二百カ所を超える文化遺産や自然景観の保存につとめている。という、環境のために滅私奉公する立派な精神なんぞを想像して引きさうになるが、湖水地方の「セミ・ナチュラル・ウッドランズ」(半分だけ天然の森)のことを喜々として語るカ

イドの表情を見てはっとした。ガーデンキングに命を懸ける隣家のメアリおほさんと同じ表情なのである。そこに現れたのは同じ快樂、すなわち自然をコントロールする快樂の表情である。いかなる形である、自然を意志のままに現出させる。造物主の気持ちになぞるかのような作業が、楽しくないわけがない。

100年前の自然の姿残る

ヒースロー空港を飛び立って眼下に遡るイギリスは、国土全体が壮大なガーデンキングを施されているように見えた……なんてあまりにもウソが見え見えの不自然なオチですが。

イラスト・下田 一貴

